王宮で農業生活を送る花嫁

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
王宮で農業生活を送る花嫁

【Ｎコード】
Ｎ６９５０Ｚ

【作者名】
佐倉風弦

【あらすじ】
「嫁に来ないか？」
農家の娘であるチャウランはある日、皇子に出くわし、チャウランの野菜を食べた彼はそう言ってきた。
「あなたが皇子様と結婚すればお母さん達はお金がたくさんもらえ……きっとあなたは幸せになれるわ」
母と父にお金たくさんもらえる攻撃を受け、送り出されたチャウランは王宮で農業生活をすることに。
皇子の嫁として、はたまた農民として奮闘する。

野菜が一個

帝都から離れた辺境の地だった。
広大な空では青と白のグラデーションが繰り広げられており、その下には一面に緑色が目立つ畑の中央に土で作られた道。
大きな籠に大量のポココと呼ばれる紫色の丸い野菜を詰めてよろよろと運ぶ少女の姿があった。
彼女は黄金色の髪を後ろで束ね、動きやすい白い服と黒いズボン、手には手袋を嵌めている。
重い籠を抱えた彼女は、後ろからカラカラという音を聞き取り、振り向いた。
この地には滅多に来ることのない馬車だった。
豪勢なデザインの黒い馬車であった。馬車には、この国――秀華（しゅうか）帝国の紋章が掘られていた。

それに気づいた少女は慌てて道を開ける。
帝国の紋章が掘られた馬車。それは、王宮の馬車だった。
この馬車が使われるのは王族が移動をする時だけである。
少女の道の端で馬車が通り過ぎるのを待った。
馬車は少女を通り越し、少し先で止まった。

少女は何事かと馬車に目を凝らした。
馬車が動かなくなったのかもしれないし、気になるものを見つけたのかもしれない。
少し時間が立つと中から数人の兵士が出てきて、その後に一人の青年が出て来た。
雪のような白銀の髪に紅蓮の瞳。金の装飾が施された青い服。
その姿を知らないはずはなかった。
何せ、彼はこの国の皇子だったのだから。

てっきり皇帝が乗っているものだと思っていた彼女は驚くしかなかった。
いや、皇帝も乗っているのかもしれないが。
皇子はこちらに目を向け、歩み寄って来る。
彼女は籠を持って後ずさる。
「君だ、そこの……籠を持ってる」
〈……もしかして、私何かしたかな？　牢屋行き？　死刑？〉
冷や汗をダラダラ流す少女の様子に気づいたのか王子は再度口を開いた。
「何か勘違いしてるようだが――俺がほしいのはその君の持ってる籠のなかの」
少女は籠のなかを確かめた。
籠に入っているのはポココだけである。
あえて説明するなら、このポココは少女が育てて不恰好ながらも何とか食べられる程度には育ったものである。
これ以外には何も入っていない。
少女は目を丸くしてポココと皇子を見比べ、恐る恐る口を開く。
「これですか……？」
「ん、その通り」
「ホントに……？」
黙って頷く皇子にポココを一つ、差し出した。
ポココを受け取った王子はポココにかじりついた。

もぐもぐと口を動かし、ごくんと飲み込んだ。

〈生で食べちゃダメなのに……。ちゃんと加熱しないと腹壊しますよ？〉

口には出せなかった。

「シャキシャキするな」

〈加熱してないんだから当たり前だろボケ〉

「しかし、うまい」

「これがですか……？」

〈何ですかこの皇子。すごくいい人じゃないですか〉

「これで収入はどれぐらいだ？　満足に作れるぐらいの金はあるか？」

「あ、いや……収入もお金もあんまり……」

何が何だか分からないまま答えた。

「ところで、君の名前を聞こうか。俺は、知ってるとは思うが、シーゼン」

「私ですか。私は、チャウランです」

名前を聞かれたということは、もしかしたら野菜をまとめて買い取ってくれるのではないかとチャウランは期待に胸をふくらませた。

シーゼンはチャウランから籠を受け取り、兵士に渡して馬車のなかに運ばせると彼女に向き直り、にっこりと笑顔を浮かべて次の言

葉を発した。

「では、嫁に来ないか？」

「はい、分かりましたー……え？」

チャウランは目を丸くした。

◆

家に帰ったチャウランは母と父と木製のテーブルを囲んで話し合いをしていた。

母と父はにこにこしていてやけに上機嫌だった。

チャウランは困ったような表情を浮かべていた。

「良かったじゃない。相手が皇子様なら玉の輿じゃない」

母の言い分に対してチャウランは難しい顔をした。

「私はまだ、十六歳だし……」

「結婚は十六歳からできるんだぞ」

父親の言葉にうっと言葉を詰まらせる。

どうにか回避しようとチャウランは何らかの言い訳を探すべく思

考を巡らせる。
そして次の攻撃。
「そもそも、今日初めて話した相手で愛なんて」
「結婚してからでも遅くはないさ」
父の遅くはない反撃。
チャウランは五十のダメージを受けた。残り精神ポイント五十。
「チャウラン」
母がお茶をするのをやめ、チャウランに言葉をかける。
笑顔で弾んだ声を発する。
「あなたが皇子様と結婚したらお母さん達はお金がたくさんもらえ……王子様と結婚したらあなたは幸せになれるわ」
「うぐ……」
母親のお金がたくさんもらえる攻撃。
チャウランは五十のダメージを受けた。残り精神ポイントゼロ。
チャウランは負けてしまった。
「大丈夫よ、お母さん達はずっとあなたのことを想ってるし、ちゃんと会いに行くから寂しいことなんて何もないわ」
「うー……」
しかし、なぜ皇子が自分に嫁に来いと言ったのかチャウランには分からなかった。

◆

数日後にチャウランは王宮に招かれた。
木製の赤い壁と恐らくそこまで高い必要性はないと思われる無駄に高い天井。
赤い絨毯が敷かれた廊下の両脇には金の装飾が施されたランプがあり、廊下を明るく照らしていた。
チャウランは兵士に案内されて王室に入った。

中央に配置された宝石の装飾が施された真っ赤な椅子に腰掛けていたのは豪勢な衣装を纏い、頭には純金の王冠を乗せた皇帝だった。
立派な白い髭を生やした皇帝からは、威圧感を感じた。
チャウランはカチコチになりながら皇帝の言葉を待った。

「そなたが、チャウラン殿か？」
「は、はい、そうです……」
緊張しながらも何とか言葉を搾り出す。
「では、シーゼンのこと、頼むぞ」
「え？」

チャウランは思わず目を丸くした。
自分が平民であるからてっきり反対されるものだと思っていたのだ。
気になって皇帝に質問してみる。
「いいんですか？」
「いいとは？」
「だって私、平民じゃないですか……」
皇帝は笑った。
「ワシは差別などせん。それに」
「？」
「金髪の子って好みなんじゃもん」
「……」
全力でこの場から逃げ出したくなってしまったチャウランは堪えた。
「皇族は白髪ばかりじゃからのう」
〈白髪って皇族だからだったんだ……〉
「決してワシが老けているわけではない。証拠にシイゼンも白だっただろう？」
「そ、そうですね」
「さて、そろそろシイゼンの所へ行くといい。あまり独占してしまってはシーゼンに嫉妬されてしまうからの」
「……」
「では、リイラン！」

皇帝は脇に控えていた侍女に声をかける。
黄金色のふわふわした髪を腰あたりまで伸ばし、狐の耳と尻尾を生やした少女だった。
ただの侍女とは思えない程可愛らしい顔立ちをしていた。

〈金髪が好きだから侍女も金髪？〉

「チャウランをシーゼンの所まで案内せよ」
「承知致しました」

リイランは花のような笑顔を浮かべてぺこりと頭を下げた。

「では、チャウラン様。こちらへ」

リイランの後に続いてチャウランは王室を出た。
赤い絨毯の廊下を歩きながらリイランが口を開いた。

「チャウラン様、私はリイゼンと言います。よろしくお願いしますね」
「あ、はい」
「えーとですね、この城の地下に農場を用意したんですよ」
「農場？」
「はい、農場です。普通に野菜を育てることが可能ですよ。今の時代、ストーンを使えば日光に当たらずとも野菜は育ちます」

ストーンというのは魔法の力が込められた魔法の石である。様々な力を持つストーンが存在し、様々な用途に使われている。
チャウランもストーンを使用して野菜作りをしている。
チャウランは水と土のストーンを使っている。

最近ようやく使い方が分かってきたというところだ。
「それで、皇子がチャウラン様に好きなだけ野菜を作るといいと」
「王宮で野菜……」
しばらく歩き続けるとリイゼンがある部屋の前で足を止め、ドアをノックしてから開ける。
なかに足を踏み入れるとシーゼンの姿があった。
シーゼンは椅子に腰掛けて本を読んでいた。
「シーゼン様、チャウラン様をお連れ致しました」
「ん、その辺に置いといてくれ」
彼は本から視線を外すことなく言い放った。
〈私は物じゃないのに……〉
「では、チャウラン様。今日はもう遅いですし、お休みください」
ほわっとした笑顔を浮かべるリイゼンの言葉を聞いてチャウランは部屋のなかを見回した。
赤い机に椅子。
タンスにクローゼット。
白いふかふかの大きなベッドが一つ。
「あの……」
「何でしょう？」
「ベッドが一つしかないんですけど……」
恐る恐る尋ねてみたがリイゼンは笑顔のままで答える。

「え？　何か問題ありますか？　夫婦なんですし、お二人で寝るんでしょう？」
「……っ！？」

〈そ、そうものなのかな〉

「では、私は失礼しますね」

リイゼンはぺこりと頭を下げると部屋を出て行ってしまう。
チャウランはその場に立ち尽くした。

〈ま、まあ、人がベッドに入ってればいきないり入ってくる人もいないですよね？　ベッド独り占め！〉

そう思い、ベッドに潜った。

◆

大きな窓から差し込んだ光を顔に浴びてチャウランは目を覚ました。
あまりの眩しさにじわりと涙が目に滲む。
チャウランは目をこすりながら身体を起こした。
それとなく、視線を落とす。
隣ではシーゼンが眠っていた。

「女の子が寝てるとこに入って来ないでください……」
「何様だ君は」
「すみません……」
チャウランはぺこりと頭を下げた。
「シーゼンは、何で私に嫁に来いって……。野菜が食べたいなら、私の家からまとめ買いすればいい話なんじゃ……」
シーゼンはむっとした表情を浮かべる。
「俺が、野菜目当てでどんな女とでも結婚できると思ってるのか」
「思ってます……」
ゴツンと頭を叩かれたチャウランは頭を抱えてうずくまった。
「ごめんなさい、思ってません……」
「まあ、俺は一応皇子だからな。そんな不純な理由で結婚相手を決めたりはしないし、例え胸が小さくても受け入れるし」
「私の胸、小さいですか……」
「ん、小さい」
「うー……」
「泣くな」
「う、うー……」

野菜が二個

無駄に広くいくつもの窓があるから太陽の光が部屋中を照らし出しており、明かりなど必要のないほどである。
中央のテーブルには白い布がかけられ、大きな鳥の丸焼きだとか野菜スープだとかふかふかしたパンだったり、数え切れないほどの豪華な料理の数々が並んでいた。
チャウランとシーゼンはテーブルを囲んで朝食をとっていた。
しかし、シーゼンはパンを口に運ぶなかチャウランは目をこすりながら泣きじゃくっていた。
ポロポロと涙がテーブルに落ち、白い布にシミができる。

「うう〜……」
「君はいつまで泣いているつもりなんだ？」

不満そうな表情でパンを皿に置き、言葉を発するシーゼン。

「うー……だって、胸が小さいって」

胸が小さいと言われた程度で泣くものは滅多にいないだろう。
そもそも、その程度で泣く理由が彼には分からなかった。
シーゼンは呆れながら呟く。

「では、巨乳と言えば泣かないのか？」

チャウランはいまだに泣きじゃくりながらこくりと頷いた。
それを確認したシーゼンはサラダが盛られた皿を手に取り、立ち上がるとチャウランの顔に押し付けた。

「ふごっ！」

いきなりの衝撃に驚いたチャウランは椅子から転落して頭を床に打ち付けてうずくまった。

皿に盛られていたサラダが床に落ちる。

「甘ったれるな、それぐらいで泣くとは何事だ。飯ぐらいきちんと食べろ。作ってくれた人に対して失礼に値する」

「う……サラダを顔に押し付けて食べ物を粗末にするのは失礼じゃないんですか……」

シーゼンはしばらく沈黙し、コホンと咳払いをした。

「わざとではないと言う言葉があってだな」

「わざとでしたよね！？」

「まあ、その、何だ。さっさと食べなさい」

「床で打った頭が痛いです」

「口にパンを詰め込んでやろうか？」

「食べます……」

よろよろと立ち上がった彼女は椅子に座るとスプーンを手に取ってスープをすくった。

スープを口に運ぶと野菜の味が口のなかに広がり、身体が温かくなってきた。

パンは予想通りふわふわで少し甘かった。

「あと、これだが……食べてみろ」

シーゼンに差し出されたのはポテトサラダだった。

さっきの普通のサラダは散ってしまったから食べることはできな

い。
チャウランはスプーンでサラダをすくうと口のなかに入れて、もぐもぐと噛んだ。
「ん？　これは……」
「気付いたか？」
「うん。ポココが入ってます」
どうやらシーゼンは数日前にチャウランから回収したポココを早速料理に使わせたらしい。
「うまいか？」
「生よりうまいです」
「だろうな」
シーゼンはにこりと笑った。
チャウランも自分でポココを料理したことは何度もあったが、家に満足な調理器具や材料がなかったため、そのまま焼いたりスープに入れたりというシンプルなものばかりだった。
「でも、これはポココのおかげですよね！」
「自身過剰だな」
チャウランが食事を終えるとシーゼンが口を開いた。
「今から案内したい所がある。とりあえず着替えてもらおうか」
「着替えるって何に？」
思えばチャウランは着替えとなるものを何一つ持って来ていなかった。

それどころか、手ぶらで来ていた。
何か服を買うにしてもお金を持っていないし、どうにもできない。
チャウランはシーゼンの顔を伺いながら恐る恐る口を開く。

「あの、服持って来てなくて……お金もなくて……」
「心配する必要はない。そこのクローゼットに大量に入ってるから好きなのを着ればいい」

◆

ひとまず服を着替えてチャウランはシーゼンの後に続いて廊下を歩いていた。
無駄に長くてむしろ疲れてしまうような廊下には赤い絨毯が敷かれ、目も疲れてしまいそうだった。
廊下を歩き続けていると、廊下ですれ違う侍女達は全員道を開けていた。
しばらく歩くと行き止まりに辿り着いた。
そこには下に下りるための階段がある。

「う……階段も長そうだなぁ……」

息を切らしながらチャウランが呟くとシーゼンは振り向いて、むっとした表情で尋ねる。

「何か言ったか？」
「い、いえ、何でもありません……」
「あ、そのな、敬語じゃなくていい」
「え？　な、なぜでございましょうか……？」

チャウランが目を丸くしてオロオロしていると彼は苦笑いを浮かべて肩を竦めた。

「主と従者というわけでもないし、何せ一応夫婦だからな。差があるのはおかしいだろう」
「りょ、了解」

チャウランはあせあせと敬礼のポーズを取ってみた。

「さて、行くか」
「何も突っ込まないのだね……」

思った通り、階段もかなり長かった。
老人がこの階段を使ったら途中で転落してしまいそうな気がしてならなかった。
ようやく辿り着くと薄暗い広間だった。
多くのランプ照らされており、特に不便は感じなかった。
その広さにも驚いたが畑があることが何より驚くことだった。
きれいに耕された畑が十個程度並んでおり、近くに置かれた箱のなかには必要な水や土のストーンも用意されている。

「おお……これは、広すぎじゃないかぁ……」
「全部使う必要はない。まあ、思う存分育てるといい。できるか？」
「もちろん！　……あ」

チャウランは困ったような顔になった。

「どうした？」

その様子に気付いたシーゼンは不思議そうに彼女の顔を覗き込んだ。

「……その、種がないというか……」

ごにょごにょと口ごもる彼女の額をパチンと叩き、彼は箱を指差す。

「箱のなかをよく見ろ」

言われた通りにしゃがみ込んで箱のなかを覗き込むとポココの種と他の種も用意されていた。

「これは……」

「君の家からもらってきた」

「な、なるほど！」

〈しかし、ここに来ても農業……〉

「燃える……」

「野菜を燃やさないようにな」

「分かってる」

「では、いつでも好きなだけここで農業をやるといい」

「了解」

「今からやるのか？」

そう聞かれ、迷ったが頷いた。
「ん、じゃあ、俺は上でやることがあるからおいとまする。何かあったらそこのエストレッタに尋ねるといい」
シーゼンが指差した方向に視線を移すと少女がいた。
少し小柄な、青いツインテールでメイド服を着た少女である。
どういうわけか、チャウランは今まで彼女の存在に気付かなかった。
〈気配を殺してたということで……！〉
「エストレッタ……。変わった名前だね？」
「まあ、エストは他の国から留学してきてるからな」
「留学。つまりお金持ちか。でも、何で侍女に……」
「貴族が留学して使用人をやるのは珍しいことじゃない。まあ、とにかく俺は上に戻る」
「了解」
シーゼンが姿を消すと広間には沈黙が訪れた。
ゆるやかな風の音だけが聞こえる。
沈黙に耐えかねてチャウランは笑顔を浮かべつつ、口を開いた。
「よ、よろしく。エストレッタさん」
「むー……エストでいいの」
「じゃあ、エスト」
「むん」
「……」
「そっちはチャウランでいいの？　呼び捨てでいいの？」

「いいのです」
「チャウランなの」
「じゃ、じゃあ、早速」

チャウランは土のストーンを手に取った。
ギュッと握り締めるとストーンが光りだし、茶色いスコップが目の前に現れた。
それを握るとチャウランは自分の頬をパチンと叩いた。

「よし！」
「失敗しちゃダメなの」
「しないよ、多分……」
「多分は、めっなのー」
「りょ、了解！」

野菜が三個

スコップを握ったチャウランは種を植えるために地面を掘り始める。
さくさくという音が響き、地面に穴が開いていく。
ちなみにチャウランの使っているスコップはストーンの力により生成されたもので、普通のスコップとは違って硬い地面でも簡単に掘り返すことができる上まとめて一列繋げて掘る場合はこのスコップの《マジック》を使うことで一瞬で一列掘れてしまう。
しばらく掘り続けていると、エストが声をかけてくる。

「まだなの？」

無表情で言葉を発する。
エストはどうやら、思っていることは顔に出さないらしい。
何を考えているのか分かりにくい。

「まだ」
「むー……」

エストは少し頬を膨らませる。
そして、箱のなかから土のストーンを取り出す。
ギュッとストーンを握ると淡い光が溢れ出し、スコップが出現する。
それを握ったエストはチャウランの隣にしゃがみ込んだ。

「じゃあ、私も手伝う」
「ホントに？　ありがとう」

チャウランはにっこりと笑った。
エストは無表情のままで地面を掘り始める。
さくさくと掘り進め、あっという間に終わってしまった。
チャウランはぐるりと畑を見回す。
すっかり穴だらけになっていて、準備は完璧だった。

「すごいなー。エストちゃんって仕事早いよね？　やったことあるのかな？」
「む、あるの。ここでは花を植える仕事もやらされてるの」
「な、なるほど」

確かにこの王宮の中庭には、大量の花が咲き誇る花畑があった。
あれだけ巨大な花畑の手入れでもしていれば、穴を掘るのが速くても何の不思議もない。
とりあえずチャウランは次の作業に移るために箱からポココの種を取り出した。

「と、とりあえず今日はこれだけ植えて……！」
「休むのですなー」
「そ、その通り」

エストに言われて素直に頷いた。

〈まだここに慣れてないから休む〉

ポココの種を半分エストに渡すと掘った穴に入れて土を被せる。
その作業が終了すると次に水のストーンをギュッと握り締めた。
出てきたのは可愛らしいデザインのジョーロだった。
チャウランは畑の中心に立ち、そのジョーロを振り回した。
畑全体に水が降り注ぐ。

「これで、よし」
「もう終わり？」
「終わり」

スコップとジョーロをストーンに戻し、片付けを済ませると階段を上がり始める。

◆

部屋に戻ると椅子に腰掛け、本を読んでいるシーゼンの姿があった。
彼はチャウランに気づくと顔を上げた。
特に変わった様子もなく口を開く。

「終わったのか？」
「とりあえず。用って本を読むことだったとか？」
「まあ、勉強は必要だからな」
「文字とか読めるんだ……」
「君は読めないらしいな」
「平民は勉強なんかしないし、文字が読めるわけない」

「勉強しなくても生きていけるからな」
「うん、でも」
チャウランは頷き、口を開く。
じっとシーゼンの持っている本を見つめていた。
「本とか読んでみたいと思うこともある。どんな物語があるのか気になるし」
「ん、では呼んでみるか」
「了解……と言いたいけど文字が読めないって」
「そうだったな」
シーゼンは本を引き出しのなかにしまう。
そして沈黙が流れる。
どちらもその場を動かぬまま、窓から入ってくる風の音だけが部屋のなかに響く。
沈黙に耐え切れず、チャウランは気になっていたことを尋ねる。
「シーゼンは……何で私を」
「君もなぜ男女が結婚するかぐらいは知っているだろう」
淡々と告げるシーゼンに対して、チャウランは顔を赤く染めながらごにょごにょと口ごもる。
「それは、その……あれ。子作りして子孫を残すため……だったっけ……」
シーゼンはため息をついた。
「俺がしているのは、その話じゃない。なかには子供を作らぬ者も

いるだろう。なぜ、誰かと結婚しようと思うのか」
「だから、それが聞きたいんだって。普通は好きな相手と結婚するし、何で私と」
「君は俺を信用してないな？」
「信用？」

チャウランは怪訝そうに眉をひそめた。

「俺が君のことを好きではないと言いたいんだろう？」
「んーと、そうなるかな」
「黙れ、バカが」
「バカって……」

反論しようとしたところで、不意に引き寄せられ口づけをされた。

「……っ！？」

チャウランは目を丸くした。

「どう愛情表現をやれば分かるんだ、君は」
「う、あう……」

お互いに顔を赤くしながら沈黙。
そして、少したつとチャウランは泣き始める。

「うー……」
「まさか……そんなに嫌だったのか……？」
「バ、バカ……そういうわけじゃ……」

チャウランはごしごしと目をこすながら言う。

「やはり、君は何も知らないな」
「何を……」
「俺は以前から君の存在を知っていたし、それに……」
「それに？」
「君はまだ俺のことも好きではないだろうが」
「嫌いというわけでも……」

嫌いだったら、親がすすめてくれても絶対に王宮には来なかっただろう。
ここに来たのは、何か自分の道が開けるのではと思ってのことだった。
シーゼンは真剣な表情でチャウランの姿を見据えながら再度口を開く。

「まだ遅くはない。これからでも、充分仲良くはなれるだろう」
「好きになれってことかな。りょ、了解！」

チャウランは敬礼のポーズをとってみた。
すると彼は苦笑いを浮かべて肩をすくめた。

「了解とは、嫁が言うセリフではないな。では、俺に尽くしてくれるか？」
「それはちょっと……」

そう言っていると頬をつねられた。
チャウランは涙目になりつつ、返事をする。

「りょ、りょーかい」
「よろしい。そうだな、俺はその君の了解という言葉が好きだ」

「了解……」
「あと、最後に一つ、約束してほしい」
ぎゅっと抱きしめられ、チャウランは目の前がぐるぐるした。
今にも気絶してしまいそうでうーだのきゅーだの呻き声を上げた。
「俺より先にいなくならないように。これだけは守ってくれ」
「りょ、りょーかい……」
〈先に死ぬなってことかな〉
「それで、その……」
「ん？」
「私は、暗殺されたりなんてことは……」
「ないから安心しろ。不審者が侵入することできないはずだ、多分」
「多分！？」
「多分」
「じゃ、じゃあ、私は野菜しか作れないから何かあっても何もできないから、何かあったら……ま、ま、ま、まままもっ……守ってくれると嬉しいというか……べ、べつに……守られなくても、安全に生活さえできれば」
パニック状態で喋るチャウランにシーゼンが制止をかける。
彼女の頭にチョップをお見舞いして黙らせた。
ぐわんぐわんするチャウランに一言。
「とりあえず、落ち着け」
「りょ、りょーかい」
「ま、まあ、どうしても言うなら守ってやらないこともないがな」
「べ、べつに守ってほしいってわけじゃ……」

「……」
「……」

お腹が減ったチャウランは何かもらおうと厨房に向っていた。
広い廊下を歩き続け、厨房に辿り着く前に倒れてしまいそうな気がしていた。
しかし、気力を振り絞って歩き続けていた。
何を食べさせてもらおうかと考えていると自然と楽しい気分になる。
ふと、パタパタと足音が聞こえた。
誰か来るのかと前方を見ると、白いドレスを着た異国人と思われる少女だった。
栗色の長いふんわりとした髪を腰まで垂らし、一部分を後ろで束ねている。

なぜか彼女は止まる気配がなく、避けきれずに思い切りぶつかってしまった。
二人は床にしりもちをついた。

「うー……」
「ご、ごめんなさい」
「ん？」

見覚えのない人物だったにで、チャウランは首を傾げた。

「あ、あなたはもしやチャウランさんでは？」
「合ってるかな」

「シーゼン様のお嫁さんですよね！　あ、私はローゼリアと申します」
「ローゼリア……。ところで、何で走ってたの？」
「すみません、お恥ずかしいところを……。実は、セージル様を探していたのです」
「セージル？」
「あれ？　まだ存じませんか？　シーゼン様の弟君ですよ」
「弟……。ローゼリアは……」

見たところ侍女には見えない。
使用人以外で皇子を探す人物が存在するだろうか。

「あ、私ですか」

ローゼリアはにっこりと微笑んだ。

「私はセージル様の婚約者です」

野菜が四個

「婚約者？」

チャウランは首を傾げた。

目の前にいるローゼリアは、シーゼンの弟の婚約者だと確かに言っている。

ローゼリアは花の飾りが施された純白のドレスに身を包んでいる。

その外見は、姫か貴族令嬢のようだった。

すると、ますます疑問が頭に浮かび上がってきた。

弟には婚約者がいるのに、シーゼンにはいなかったのか疑問に感じた。

弟にだけいて、兄にはいないと言うのもおかしい。

〈どうなんだろう……〉

婚約者がいたのに、自分を選んだのかそれともいなかったのか気になったがあまり考えないようにしようと決めた。

ローゼリアに視線を移す。

彼女はシーゼンの弟であるセージルを探していると言っていた。

しかし、生憎まだセージルとの面識はなく、居場所も知らない。

チャウランは、どうすればいいかと思考を巡らせ、笑顔を浮かべた。

「じゃあ、私も一緒に探すから」

ローゼリアはぱあっと明るい表情になり、ぺこりと頭を下げる。

「では、お願いしますわ」

◆

居場所は分からないので、王宮内を適当に探して回ることとなった。
セージルの部屋にも行ってみたが見つからず、広間や食堂にもいなかった。
使用人達にも聞いて回ってみたが誰もどこに行ったのか知らなかった。

「何でこうも……」

チャウランはため息をついた。
王宮には大勢の使用人がいるから、誰かが姿を見かけていてもおかしくないと思ったのだが、どうやらセージルは隠れるのがうまいらしい。

〈でも、何で隠れたりするんだろ〉

チャウランは、王宮内を走り回って疲れたのか床に手をついて息を切らしているローゼリアに声をかける。

「セージルさんは何で隠れたりするの？」
「セージル様は脱走して町に行くのが好きなんだそうですわ」
「何でそれ、先に言わなかったかな」

「ぐ……単に忘れてました」

王宮から脱走となると、ここにはいない。
いるとすれば、町だろう。
しかし、王宮内は自由に動けるが、王宮から出るとしたらどうなのか疑問が生まれる。
その疑問を解消するべくローゼリアに尋ねることにした。

「私達ってここから出られる？」
「多分出してもらえません。何かあったら大変ですもの」
「で、ですよね……」
「では、私も脱走するしか……！」

ローゼリアが両手で握り拳を作ってやる気を出していると足音が聞こえた。
恐る恐る振り向くとシーゼンの姿があった。
じっとこちらを見る。

「し、シーゼン様……」
「わざわざ探しにいかずとも日が沈む頃には戻ってくるだろう」
〈どうせ時間になれば戻ってくるなら、探す必要もなかったかな〉
ローゼリアはすぐにでも伝えたいことがあったのかもしれないが。

◆

大きな窓から外を覗くと、空は漆黒の闇に包まれ多くの星が散りばめられ、煌いていた。丸い月は淡い光を放ち、ぼんやりと地上を照らし出していた。
町の方を見ると、明かりが見える。
そして部屋のなかを見回す。
椅子に腰掛けて分厚い本に真剣に目を通しているシーゼンの姿。
ベッドの脇の椅子の上で正座してそわそわしているローゼリアの姿。

「ところで……」
「何でしょうか？」
「何でローゼリアはここに？」

尋ねると彼女は、にっこりと可愛らしい笑顔を浮かべる。

「一人で待つのは寂しいですから」
「……」

チャウランは何も言わなかった。
恐らく何を言っても無駄だろうと思い、言葉も出て来なかった。

「あ、私のことは気にせずに好きなだけイチャイチャしてていいんですよ？　キスでもベッドでイチャイチャでも」
「するかボケ」

そんなやりとりをしていると、シーゼンが本を閉じて机に置いた。
「チャウラン、ソイツをつまみ出せ」
「りょ、了解」
チャウランはローゼリアの腕を引き、部屋の出口へと向かう。
ローゼリアはじたばたと暴れ、床に座り込む。
そして半ば涙目になりながらチャウランの顔を見ながら口を開く。
「何するんですか！　私はここで待つんです！」
そう言いながら首を左右に振る。
腕を引っ張って立ち上がらせようとしても、身体に力を入れて意地でも立ち上がらずについには、床でうずくまって動かなかった。
どうみても高貴な家柄の者がするようなことではなかった。
どうやら、彼女にはあまり品というものがないらしい。
外見だけは可愛らしいけれども。
チャウランが困り果てていると、不意にドアが開いた。
「こんばんは、やっぱりかぁ」
一人の少年だった。
シーゼンと同じく雪のような白銀の髪を特に束ねる必要もなさそうな長さだが少しだけ束ね、海のような青い瞳。そして赤い礼服を身に包んでいた。
彼は苦笑いを浮かべて、ローゼリアに声をかけた。
「君はまたそんなことをしてるのかい？　今なら見放さないから、早く立つといいよ」
「セージル様！」

ローゼリアは慌てて立ち上がり、彼の元へ向かった。
「セージル？」
チャウランは首を傾げた。
セージルは確か、シーゼンの弟の名前だ。
「え？　じゃあ、あれがシーゼンの弟？」
「ん、その通り」
「な、なるほど……」
シーゼンとセージルを見比べてみる。
髪の色は同じで目の色は違う。
性格も違うように思える。
チャウランは呆然とした様子で一言漏らす。
「セージルさんの方が愛想は良さそうだ……」
「今、何と？」
「何でもない……」
ようやくローゼリアの相手が終わったのか、セージルはこちらに来た。
そして満面の笑顔を浮かべて挨拶する。
「はじめまして、君がチャウランだね？」
「う、その通り」
「俺はセージル。よろしくね」
「よろしく」
「可愛いなぁ。兄さんも女の子の好みはまともだったんだね。この

子もらっていい？」
「そこの婚約者はどうする気だ」
ローゼリアは泣きそうな顔をしてぷるぷる震えていた。
それを見て彼は苦笑いを浮かべた。
「やだなぁ、冗談だよ。流石に兄さんのお嫁さんに手を出したりはしないさ。じゃあ、今日はこの辺で」
セージルはローゼリアを連れてその場を後にした。

「しかし、ローゼリアは可哀想だな」
ふと、シーゼンがそんなことを呟いた。
ベッドでうとうとしていたチャウランは起き上がり、身を乗り出した。
「何で？」
「セージルが相手ではな」
「そうかな？　ローゼリアはホントにセージルさんのこと好きみたいだったけど」
「それが余計に不憫だな。アイツは浮気性だからな」
「浮気性……」
皇子が浮気性とは大問題である。
町に出かけるのが好きというのも、町で可愛い女の子を探すため

なのかチャウランは気になった。
もし、セージルが婚約者がローゼリアじゃなく他の女の子でも問題ないとしたら――。
〈ローゼリアはどうなるんだろう〉
セージルはローゼリアを好きなのか。
嫌いではないだろう。
恐らく好きという部類には入っているはずだ。
しかし、ローゼリアでなければならないと言ったら実際どうなのか心配になってきた。
「どうなんだろう……」
「……」
難しい表情を浮かべて考え込むチャウランにシーゼンは口づけした。
「そのことは考えなくていい。むしろセージルには関わるな、ろくなことがない。何も考えずに寝ろ」
「うー……いきなり何するんだぁ……。私の家には、おやすみのキスの習慣なんて……」
恥ずかしくなってとりあえずに布団に潜った。
〈ローゼリア達のことは、こっそり考えよう〉
そう思いながら、チャウランは目を閉じた。
視界が真っ暗になり、眠りに落ちる。

野菜が五個

朝食を済ませるとチャウランは地下の畑を確認しに行くことにした。
ベッドの周囲に取り付けられた赤いカーテンを閉めるとベッドの上で着替え、ベッドから降りた。
今日も本を読むシーゼンに声をかける。
あまり邪魔はしないようにと大声は出さずに、小さめの声で。

「じゃ、地下に行ってくる」
「行って来い」

彼は、真剣な表情で本から目を放すことなく返事をした。
それを確認すると部屋を出る。
部屋を出ると廊下にはエストが控えていた。
彼女はチャウランに気づくと相変わらずの無表情で尋ねてくる。

「畑に行くの？」
「うん」
「じゃあ、案内するの」

そう呟き、エストはくるりと背を向けた。
表情から感情を読み取ることはほとんどできないが、意外と親切なのかもしれない。
愛想がいいとは言えないが、好感を持てる人物だった。

エストの後に続いて階段を下った。
階段を下るのは相変わらず重労働だった。その上、無駄に長いため余計に疲れてしまう。

地下に農作業をするにせよ、階段を上がって部屋に戻るための体力は残しておいた方がいいだろう。
ようやく階段が終わると一面に畑が見えた。
昨日水を撒いた地面は乾いていた。

「よし、水を」

畑の脇に置かれた箱から水のストーンを取り出した。
ギュっと握り締め、ジョーロを出現させると昨日と同じ手順で畑の中心に立ち、水を振りまいた。
たったの一振りで水が畑全体に広がる。

「早く大きくなるといいな」

にこにこしながら呟いているとエストが問いかけてくる。

「でも、まだ芽も出てないの」
「う……分かってる」

〈単に早く大きくなるといいなって言っただけなのに〉

箱のなかを整理していると、足音が響いて来てローゼリアが階段を下りて来た。
彼女は、明るい表情を浮かべてさして階段で疲れた様子もなく、チャウランの元へとやって来た。
声を発する前に畑を関心した様子で一通り見回し、チャウランに向き直る。
ぱあっと明るい笑顔を浮かべた。

「ここがチャウランの畑なのですね？　お野菜、楽しみにしてます

わ」
「知ってたの？」
チャウランが不思議そうに首を傾げていると彼女は笑顔のまま、こくりと頷いた。
そして丁寧に説明してくれる。
「もちろんですわ、シーゼン様からお聞きしていましたもの。それに、私もチャウランが作ったポココを頂きました」
「ポココ、どうだったかな？」
恐る恐る尋ねてみた。
「とっても美味しかったです。チャウランのご家族はみんな農業をやってらっしゃるんですか？」
「うん。親戚も農業やってる人しかみないなぁ。あ、いや」
「？」
「伯母さんは家庭教師とかやってたみたい。どこの家行ってたか知らないけど」
「家庭教師ですか。珍しいですね」
確かにローゼリアの言う通りだった。
そもそも平民というのは、ほとんど勉強などしない。
だから当然、人に教えることもできない。
家庭教師も当然、貴族の者ばかりだった。
チャウランの家系はみんな平民で親戚のなかにも貴族だった者は一人もいない。
そのなかで、なぜ伯母が家庭教師をしていたのか謎だった。
しかし、伯母は数年前に亡くなって今は確かめることはできない。
両親に尋ねてみたことはあるが、何も知らない風だったから分か

らずじまいだった。

「でも、世の中には天才という部類の方もいますしね。もしかしたら、その伯母様は天才で勉強を習わずともできた方なのかもしれませんわ」

「確かにそうかも……」

何となく納得した。

そんななか、少しだけ伯母のことを思い出した。

伯母は他の人とは違ってチャウランにとって不思議な存在だった。

美人で優しく、そして何か自分に近いものを感じていた。

それが何なのかは分からなかったが、随分と親しくしていて伯母が亡くなった時は何日も寝込んでしまった。

「あ、もう上に上がろう？」

「そうですね」

◆

廊下を歩いていると、不意にローゼリアが足を止めた。

チャウランは気になって彼女の顔を覗き込んでみた。

「どうしたの？」

「実は、国王様に用事があったんです」

「そうなんだ。じゃ、行って来なよ」

国王に用事というなら、何か大事な用事かもしれないとチャウランはついて行かないことにした。

ローゼリアは「ごめんなさい」とぺこりと頭を下げて謝りながら早足で駆けて行った。

ドレスを着た女の子が廊下を走る姿はシュールなものだった。

あんな服装で転んでしまわないのか少し心配でもあった。

エストも他の仕事があるらしく、分かれると一人で部屋に向かうことにした。

無駄に広い廊下にポツンと取り残されているような気がした。

「べ、べつに寂しくなんか……」

「あ、チャウランじゃないか。そんな寂しそうにしてどうしたの？」

振り向くと笑顔を浮かべたセージルの姿があった。

愛想がいいのはもはや特徴だろうか。

この人物がローゼリアの婚約者であり、シーゼンの弟。

何を言えばいいのか迷っていたが、昨日のことを思い出して尋ねた。

「今日も町に出かけるの？」

「うん、そうなるかな。どう？　良かったら連れてってあげるけど？」

そう言われて少し迷ってしまった。

チャウランはこの王宮には来たが、今だに町のなかを見て回ったことはない。

実際はどんなものがあるのか気になっていたところだったが、首を左右に振った。

「それは無理かな。お、怒られそうだし……」
「だろうね。ああ見えて兄さんは怒らせると厄介だしね」
「お、怒らせるとダメなんだ……。それより、ローゼリアを連れていってあげた方が……」

するとセージルは困ったような顔をした。

「ローゼリアは……ダメかな」
「何で？」
「いろいろとあるんだよ」

何があるのかチャウランには見当もつかなかった。
普通に王宮から連れ出して遊ぶことには何か問題があるのかもしれない。
しかし、外へ出ていろんなところへ連れて行ってもらえる方がローゼリアも嬉しいはずである。
セージルとローゼリアの間には何かが足りてない気がしてならなかった。

「あ、そうだ。今日は夕方には戻ってくるから、よかったら話でもしない？」
「？」
「兄さんのお嫁さんがどんな人なのか気になるしさ」
「分かった」

チャウランはこくりと頷いた。
彼女もセージルと話し合いがしたかったから。
実際、セージルがどういう人物なのかもはっきりは知らないし、ローゼリアとの関係はどういうものかも疑問だった。

彼はローゼリアが自身のことを想っているようにローゼリアのことも想っているのか。

〈愛がなければ何も芽生えないと言うし……〉

考え込みながらセージルを見送った。

そして部屋に戻ることにした。

◆

部屋に戻るとテーブルに肘をついてクッキーを食べるシーゼンの姿があった。

テーブルに置かれた丸い形のクッキーからは甘い香りが漂ってきた。

目を輝かせながらじっとクッキーを見つめていると、シーゼンは呆れ顔で一言。

「そんなにほしいなら、食べればいいだろう」

「う、うん」

チャウランはこくりと頷いてテーブル前の椅子に腰を降ろした。

クッキーを一つだけ手に取り、丸ごと口に入れた。

サクサクとした食感で中は少し柔らかくて甘いクッキーだった。

「う、うまい」

「そこは美味しいと言った方が……」
「？」
「もういい」

クッキーの隣に用意されていたジュースも口に含む。
チャウランは難しい顔をしてクッキーをかじりながら、呟く。

「ところで」
「ん？」
「結婚した後ってこんなもんなのかな」
「まあ、今の状態なら……ただの同居人、もしくは友人といったところだな」
「シーゼンはどういう経緯で私のことを好きに……。んと、一目惚れされるような外見でもないしさ……」

実際、チャウランは可愛らしい外見ではあるが、絶世の美女だとか一瞬で相手が恋に落ちるようなものではない。
そして、皇子が単なる一目惚れで結婚相手を決めるというのも考えにくい。
するとシーゼンは難しい表情をした。

「俺は、以前から君を知っていた」
「前から……？」

一体どういうことなのか分からない。

「以前に君のことを教えてくれた人物がいる。それだけだ」
「……」

自分の知り合いでシーゼンと話したことのある人物がいるとは驚

きだった。
思考を巡らせてみたが、それが誰なのか見当もつかなかった。
全員平民で、王宮に足を踏み入れることができるような者は一人もいなかったはずである。
シーゼンは席を立ち、窓の脇の椅子に腰を降ろした。

――じゃあ、俺が守っていい？

――あなたは子供で、私は大人なの。だから、それは難しいわ

――でも……。

――じゃあ、お願いしていい？　あの子を……。

〈説明するのは難しいな〉

シーゼンはため息をついた。

野菜が六個

空が夕焼け色に染まって来た頃、チャウランは王宮の入り口でセージルを待ち構えていた。
入り口の前で仁王立ちし、明らかに邪魔になるだろう位置にいた。
じっと入り口を見つめていたが、なかなか人が入って来る気配はない。
脇に立つ兵士が困ったような表情をチャウランを見つめていた。
やがて、彼はチャウランに声をかける。

「チャウラン様、一体どうしたのですか？」

そう尋ねられ、チャウランは迷わずに答えた。

「セージルさんに話があるから待ってる」
「そ、そうですか……」

兵士は何も入り口で待つ必要はないにと思いながらも、後ろに下がった。
じっとしていると、ようやく扉が開いた。
大きな扉はギィと音をたてて、ゆっくりと開いていく。
扉が完全に開き、セージルの姿が見えると彼の元へと駆け寄った。
セージルは目を丸くしてチャウランの姿を見た。
首をかしげて一言。

「一体どうしたの？」
「話をするって言ってたから……」
「ああ、何だ。そういうことか」

セージルはにっこりと笑顔を浮かべた。

「そんなに俺に会いたかったんだね？　兄さんに怒られても責任取れないからね？」

「なわけあるかぁ！　単に聞きたいことがあるだけ！」

「そうなんだ？」

セージルは周囲を見回し、チャウランに向き直る。

「ここじゃあ、話しにくいから移動しようか」

◆

セージルの後に続いてチャウランが辿り着いたのは中庭だった。

白いテーブルと椅子が用意されており、花壇には大量の薔薇が咲き誇っていてお茶をするには絶景のスポットである。

赤く染まった空のせいか、赤みを帯びた風景はどこか懐かしさを感じさせる。

セージルに促されてテーブル前の椅子に腰を降ろすと、侍女がクッキーと紅茶を運んで来た。

甘い匂いの漂うクッキーを見ると食欲がわいた。

しかし、紅茶を見てチャウランはうっと難しい顔をした。

「どうかしたの？」
「えと、私は紅茶は飲めないというか……」
「あ、そうだったんだ。じゃあ、ジュースを持って来てくれる？」

セージルが侍女に声をかけると彼女はこくりと頷き、その場を後にした。
とりあえずチャウランは目の前の皿に盛られたクッキーを一つ手に取って口に含んだ。

「で、話ってのは何かな？」
「それは……」

言いかけて口を噤んだ。
いざとなるとどう言えばいいのか分からなかった。
普通に本当にローでリアのこと好きなんですかなどと聞くのは失礼な気もした。

「んと、忘れたかな」

とりあえずそう言うしかなかった。
セージルはそれを聞いて苦笑いを浮かべた。

「そうなんだ？　おっちょこちょいなんだなぁ」
「うー……」

むっとしたが、忘れたことにしてしまったので反論はしない。
セージルは紅茶を飲み、カップをテーブルに置くと口を開いた。

「チャウランはここに来て楽しい？」

「え？」

急な質問で目をぱちくりさせた。

あまりにも単純な質問。

突然シーゼンに求婚され、両親に背中を押されて結婚してここでも農業生活。

大好きな農業ができること、仲のいい人ができたこと。

これだけあれば、彼女にとって不足はなかった。

「うん、楽しいかな」

チャウランは笑顔で頷いた。

「それは良かった。俺も楽しいよ」

そう言いながら、セージルは笑顔を浮かべて手招きをした。

チャウランは不思議に思いながらも立ち上がり、セージルの元へと行ってみる。

すると不意に抱きしめられた。

チャウランは顔を真っ赤にした上に混乱した。

「せ、セージルさん……？」

「可愛いなあ、真っ赤だよ？」

「あ、あああの……これは、浮気というやつでは……」

「そうかもしれないね」

〈いやいや、そうかもしれないねじゃないだろこれー！〉

もしかしたら、いつもで町で女の子と遊んでいるかもしれないと不安を感じ始めた。

もし、そうならローゼリアはどうなのか心配だった。
「私、一応人妻で……」
とか言ってみる。
ふと、足音が聞こえた。
振り向くとシーゼンの姿があった。
「……詳しい話は後でゆっくり聞こう」
「はい……」
シーゼンに腕を引っ張られてその場を後にした。

◆

部屋に戻るとシーゼンはむすっとしていた。
彼がチャウランの方を見ると、チャウランはなぜか姿勢を正した。
「あれだけ関わるなと言っただろう」
「な、何で関わっちゃダメなのかな……」
そう呟くと、シーゼンは困ったような表情を浮かべた。

ため息をつき、チャウランを引き寄せた。
チャウランは驚いて身を強張らせた。恐る恐るシーゼンの顔色を伺う。
「説明しないと分からないのか？」
「う……」
何を言えばいいのか分からずに口を噤んだ。
しばらく何の会話もなく沈黙が流れた。
シーゼンに険しい表情で見つめられ、チャウランはぶるぶる震えだした。
「う、うー……」
「……チャウラン」
「うー……ごめんなさい」
チャウランが泣き出すとシーゼンは困ったような表情を浮かべた。ぐすぐすと目をこすっていると、シーゼンはチャウランを抱えたと思うとベッドに放り投げた。
チャウランは何が何だか分からず、目をぱちくりさせた。
「し、シーゼン……？　ぐす……そ、その……私、まだ経験とかないし、具体的に何するのかしらないし、まだ十六歳だし……というかあんな恥ずかしいことできません。うー……」
シーゼンはそう口走るチャウランの額を叩いた。
チャウランは「はうっ」と声を出し、うずくまってさらにぐすぐす泣いた。
「君はバカか。泣いてる相手にそんなことするわけないだろう」

「じゃ、じゃあ、なに……」
彼は引き出しからハンカチを取り出して、チャウランの顔を拭いた。
その後、彼は笑顔で告げた。
「今日はもう休め」
「んと、寝ていいの？」
「ああ」
「でも……」
セージルとローゼリアのことが脳裏をよぎる。
彼が町で他の女の子と浮気をしているかもしれない。
恐らくそれをローゼリアは知らないだろうし、もしそれを知ってしまったらローゼリアは傷付くだろう。
何とかセージルに浮気をさせないようにしたいと思っているのだが。
考え込むチャウランの姿を見て、シーゼンはため息をついた。
「仕方ないな」
そう呟き、彼はチャウランの頭をわしゃわしゃと撫でた。
「そんなに二人のことが気になるなら、俺も手伝ってやるから安心して今は寝ろ」
「ん、分かった」
こくりと頷いた。
そして布団に潜る。

◆

目を覚まして、起き上がると窓の方を見た。
窓から見える外は真っ暗で星の光がちらほらと見えた。
時計に視線を移すと、まだ夜であることが分かった。
ぐうとお腹が鳴ってチャウランはお腹を押さえた。

「お、お腹が……晩ご飯を……」

よろよろとベッドから出て、食べ物を求めて廊下へと出た。
まだ眠い目をこすりつつ、無駄に長くて赤い絨毯で目がおかしくなりそうな廊下を歩き続けた。
そうしていると、前方からリイゼンが歩いてきた。
リイゼンはチャウランの元へと来ると笑顔を可愛らしい笑顔を浮かべる。

「こんばんは、チャウラン様。起きてらっしゃいましたか？　えーと、お腹は空いてますよね？」
「うん、ご飯ほしい……」
「ですよねー。皇帝様が一緒に食事しないかと言っておられます。どうですか？」
「うん、いただきます」

「では、案内しますね！」

チャウランはリイゼンの後に続いた。
この王宮に来た最初の日以来、皇帝には会っていなかった。
同じ王宮にずっといるというのに不思議なことである。
皇帝は厳格な雰囲気はなく、のんびりした感じの接しやすい人柄でチャウランも安心していた。

皇帝専用の食堂に行くと、白い布がかけられた大きなテーブルがあり、そこには色とりどりの食べ物が並べられていた。
具がたくさん入ったスープやパスタ、丸焼きなど、やはり平民にはなかなか食べられないものばかりである。
皇帝が椅子に座っていて、その傍らにいたのはシーゼンだった。
皇帝は愛想良くチャウランを出迎えてくれた。

「おお、来たかチャウラン。そこに座りなさい」
「は、はい」

促され、チャウランはテーブル前の椅子に腰を降ろした。

「さて、チャウラン。この王宮での生活はどうかの？」
「んと、楽しいです」
「それは良いのぅ。やはりお嫁さんには楽しく生活してもらわないと困るからの」

皇帝はお茶をすすりながら告げた。
チャウランはシーゼンに視線を移した。

「シーゼンは食べないの？」
「ん、俺はもう済ませたからな」
「そうなんだ……」

チャウランはチキンにかぶりついた。

「それにしても、金髪っ娘は可愛いのぅ。チャウランはワシの妻の若い頃に似ておるのぅ」
「そ、そうですか……？」

皇帝に妻がいるのは当然のことだろう。でなければ、皇子が生まれるはずはない。
ただ、后妃の姿を見たことがなかった。
いるなら、必ず紹介されていただろうし、既に亡くなっている可能性が高いと思い、そこには触れないことにした。
しかし、皇帝はよほど金髪の女の子が好きらしい。
口ぶりからして、后妃も金髪だったのだろう。

「チャウラン、シーゼンなどやめてワシの嫁にならんかの？」
「それはちょっと……」
「うーむ……仕方ないの」

チャウランは皇帝と食事をするということで、緊張して何も話せないかもしれないと心配していたのだが、この皇帝は話しやすい相手で全くそんなことはなかった。
チャウランはスープを飲みながら皇帝を観察した。
この皇帝がシーゼンの父親なのが少し信じられなかった。
あまり似ていない。セージルも似てない。
親子でもあまり似ないものだろうかと思いつつ、もしかしたら昔はシーゼンやセージルみたいな感じだったのかもしれないとも思っ

た。
もしそうなら、シーゼンやセージルは将来こんな感じになってしまうということだが。
「今日は好きなだけ食べるのじゃ。未来の后妃に乾杯じゃ！」
「は、はい」
チャウランはこくりと頷いた。
后妃と言われて少し心配になってしまった。
自分は后妃と言えるほどの人物になれるのか少し不安だった。
平民として育ったのだから、王宮については何も知らない。
「しかしチャウランは可愛いのぅ」
どうやらこの皇帝は可愛いというのが口ぐせらしい。
しかし、息子の嫁に可愛い可愛いと連呼する父親が果たして他にいるだろうか。
「シーゼンも自慢話ばかりするしの」
「え？」
チャウランは目を丸くした。
「……父上、その話はできれば本人には……」
シーゼンは珍しく焦った様子で皇帝に声をかける。
「しかし、チャウランのことが可愛くて仕方ないんじゃろ？　伝えなくてどうするんじゃ」
「そ、それは……」

チャウランとシーゼンは二人揃って顔を赤くする。

「何じゃ二人とも初々しいのぅ。子作りはもうやったのかの？」

流石にシーゼンが皇帝の頭を叩いた。

「父上、そういう話題は出さないでほしいんだが……」

「こ、ここ、こここここ……子作り……う、う……ちょっと失礼します！」

「あ、チャウランよ！」

チャウランは慌てて食堂を出た。

「チャウラン様！？」

リイゼンが追いかけて来たが、全力で逃げた。

野菜が七個

「チャウラン様！　待ってください～！」

廊下を走っているとリイゼンがパタパタと追いかけて来る。

子作りだとかそんな話になったあの場に戻ることなどできることはなく、チャウランはさらに走る速度を上げた。

廊下を走り続けてもリイゼンはついて来る。

どうやらリイゼンは走るのは慣れているらしい。

毎日無駄に広い王宮のなかを行ったり来たりしていれば足腰も鍛えられるだろうが。

「ほっとけってー！　私、男の人と子作りの話なんか……」

できるわけがないとか続けようとした所で、廊下がいつもピカピカにきっちり掃除されているのが災いしたのか、つるっと滑って転倒した。

前側に倒れて床に思い切り額を打ちつけた。

「ちゃ、チャウラン様……！　大丈夫ですか？」

リイゼンが慌てた様子で駆け寄って来る。

「う……」

チャウランはゆっくりと起き上がった。

彼女の額は赤くなっていた。

「た、大変です！　手当てを！　手当てをしましょう！」

「え？」

◆

チャウランは怪我人の手当てをする部屋まで連れていかれた。
リイゼンはチャウランに椅子に座るように促し、棚から消毒液を持ってきた。
チャウランは首を左右に振った。

「消毒は嫌だよ……」
「でも、放っておくとひどくなるかもしれませんよ」
「で、でも消毒は……」

嫌がるチャウランを前にリイゼンは困ったような顔をした。
そもそも、消毒ぐらいでここまで嫌がる人はなかなかいない。

「チャウラン様、これを見てください」
「え？」

チャウランがこちらを見た瞬間に額に消毒液を染み込ませた布を押し付けた。

「うー……」
「痛くないですよー」

「痛いですよー……」

◆

治療が終わるとチャウランは部屋に戻ろうと廊下を歩いた。
ズキズキと痛む額を押さえながらよろよろと歩いていた。
前方を見るとシーゼンの姿があった。
チャウランは特に速度を変えることはなく、シーゼンの前まで来ると足を止めた。

「廊下は走るなと言われなかったか？」
「言われたことあるけど……」
「もう遅いから風呂にでも入って寝ろ」
「う、うん」

こくりと頷いた。
チャウランは歩き始めるが、すぐに足を止めて彼に向き直った。

「風呂の場所忘れた……」

チャウランにこの王宮は広すぎた。
今までの家と比べるとあまりにも広すぎて、まだどこに何があるのか把握しきれてないのが現状である。
シーゼンはため息をつくとチャウランを案内することにした。

彼の後に続いて風呂場へと向かう。

◆

風呂から出た後は部屋に戻り、チャウランは書庫から絵本を持ってきて目を通していた。
文字を読むことはできないから絵本で絵だけ鑑賞しようとベッドに潜って読んでいた。
シーゼンは机にむかっていて、何かを書いていた。
邪魔をしないようにと特に声をかけたりはしなかった。
窓から夜風が入り込んできて、チャウランはぶるっと震えた。
それに気づいたらしいシーゼンは、開いていた窓を閉めてカーテンも閉めた。

「そう言えば、シーゼンには婚約者はいなかったのかな」
「婚約者？」
「うん、セージルさんにはローゼリアがいるから」
「まあ、俺は既に決めてたからな。婚約者を用意する必要はなかったんだ」
つまり、好きな相手がいれば婚約者は用意しないものらしい。

シーゼンは以前からチャウランのことを知っていて、既に決めていたのだと。
しかし、どうしても彼が誰を通してチャウランのことを知ったのか分からなかった。
シーゼンも布団に潜る。
二人で天井を眺めながら会話をする。

「シーゼンは皇帝になるんだよね」
「そうだな」

自分の隣にいる人物が皇帝になる。
それは何だか不思議な気分だった。
そして自分がきちんとした后妃になれるのかも心配でならなかった。
役に立てるのか。

「シーゼンはいつも冷静だし……」
「……冷静？」

シーゼンは怪訝そうに眉をひそめた。
チャウランを引き寄せ、口づけをする。

「ん……」
「俺は冷静ではないな」
「え？　え……。だって」
「俺もどうすればいいのかよく分からない。好きなら、何をやればいいのか……」
「う……私も分からないし……」
「そうか」

チャウランはじっとシーゼンを観察した。
これといって変わった様子は見られない。
シーゼンはいつも冷静な様子を装っているのかもしれないと思った。

「一つ、真剣なことを聞くが」
「なに？」

急にシーゼンが口を開いたのでチャウランは目をぱちくりさせた。

「俺のことは好きか？」
「え？　い、いきなりそんなこと……」
「好きか嫌いか二択で答えろ」
「うっ」

チャウランは口を噤んだ。
曖昧な返答で済ませるつもりが、そう言われてしまってはしっかり答えるしかない。
顔が熱くなってきた。
ストレートに好きか嫌いか言わなければならない状況というのは結構厳しい。
恐る恐るシーゼンの顔色を伺ったが、今だに真剣な表情でこちらを見ていた。
逃げられないと悟り、ぐるぐるしながら答える。

「そ、そ、その……どっちかと言えば好きかな……」
「では、キスはできるか？」
「できません」
「即答するな。できませんじゃない、やれ」
「で、でも……」

今まで自分から誰かにキスをしたことなんてない。

「キスの仕方とかしらないし……」

「とぼけるな」

「うっ」

チャウランはカチコチになりながらシーゼンを見た。

そしてシーゼンの頬に口づけした。

「……よく分かった。君は可愛いな」

「！？」

チャウランは首を左右に振った。

そんなやりとりをしているうちに、いつの間にか眠りに落ちた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6950z/

王宮で農業生活を送る花嫁

2011年12月29日15時46分発行